

氏。右は副総統に当選した蕭美琴氏 川台北(共同)

「甲州ブドウの母方は東アジア品種の刺ブドウ。父は西方民間録」には、13世紀「河欧品種で中国で交配し誕生した」。国の酒類総合研究所は、北省と山西省太原、北京にブドウ園があった。太原からは甲州のDNA解析の結果をこのように公表。これが甲州の歴史を採る糸口となった。

今から1万年前、最終氷河期が終わるとブドウは再び繁



むこのブドウは温暖湿潤地帯では育たなかったためだ。

殖を始め、北米35種、東アジア40種、西欧2種の品種群を形成し陣地を拡大。なかでも繁殖力を増した西欧品種は欧州全土を席巻する一方、シルクロードを通り中国に到達。

7世紀の唐では、長安(西安)の宮中でも西欧品種のブドウとワインがつくられ、次第に中国北西部に広まってい

甲州ワイン 歴史から見た未来

紫色のブドウは紫桜と呼ばれ、日本の甲州となっていく。このブドウは15世紀に日明貿易で京都に渡る。1487年には公卿三条西実隆の庭にブドウ棚が架けられ、2年後に結実。その後7年間ブドウは宮中に献上されている。既にこの頃には樹木商人が現



仲田 道弘
やまなし観光
推進機構理事長

れ、貴族の庭では樹木の移植、剪定、接ぎ木が行われていた。そして16世紀には日本医学の祖曲直瀬道三によつてブドウは薬として紹介される。

江戸時代には、名古屋城や甲府城の菓園・樹木畑でブドウが栽培され、徳川家ではブドウやブドウ酒が滋養の進物になっていた。各地でも献上

品余りなどのブドウが流通められ、英国では、それらのワインも消費者に受け入れられつつあるという。

明治時代、輸入した欧州品種が病害虫で全滅するなか、刺ブドウのDNAを持った甲州は、日本の湿潤気候を生き抜き、現在では500年の歴史を刻むことができた。

さて、現在は西欧品種のメロローやシャルドネなど有名ブドウだけが世界中で栽培され、本来の適合生息地以外でも農業等に頼つて作られている。この状況にカナダのシヨーン・マイルズ博士は「ブドウを攻撃する病害虫は進化し続ける。同一遺伝物質だけを使っていると破滅は目に見えている」と警鐘を鳴らす。

既に欧米諸国では、古くから伝わる地元品種が見直され始めている。また、病害虫に抵抗力を持つ北米、東アジア品種と欧州品種との交配も進

められ、英国では、それらのワインも消費者に受け入れられつつあるという。翻つて日本はどうか。甲州に加え、日本の気候に合わせ、品種交配したマスカット・ベリーA、山幸などの品質は高まっているが、その価値は十分評価されず「西欧品種でなければワインでない」と考える人がいまだに多い。しかし、日本の気候では、西欧品種の栽培は農薬や雨よけビニールに頼らざるを得ず、世界で進む「多様な品種による持続可能なワインづくり」からは遠ざかっていく。いま大切なのは、まずはつくり手も飲み手も西欧品種至上主義から脱却すること。そして、甲州で日常飲みのオーガニックワインを目指すことだと考える。甲州には、温暖湿潤気候に耐える刺ブドウのDNAがあるのだから。

なかだ・みちひろさん

1959年北杜市生まれ。筑波大卒。山梨県観光部長を経て、2020年から現職。山梨県立大特任教授。山梨オーガニックワイン推進コンソーシアム会長、OIV登録品種協議会顧問、甲州ワイン輸出プロジェクト(KOJ)顧問。著書に「日本ワイン誕生考」「日本ワインの夜明け」など。